

蕪村代表三句と故郷（淀川・毛馬村）の実景と俳景

Buson's Three Masterpieces and His Own Sense of Hometown

木佐貫 洋

KISANUKI Hiroshi

Abstract: The following are the Buson's three most well-known Haiku;

1. *haru no mizu yamanaki kuni wo nagarekeri* (age 54, 1769)
2. *nanohana ya tsuki wa higashini hi wa nishi ni* (age 59, 1774)
3. *samidare ya taiga wo mae ni ie niken* (age 62, 1777)

The three haikus mentioned above were written over 30 years after Buson left his hometown of Kema Village near Yodo River. Masaoka Shiki referenced the 1st haiku when he advocated the importance of portraying nature. The 3rd Haiku was written when Buson composed the poem, "Shunpu Batei Kyoku." The 2nd and 3rd Haikus are culturally significant works, frequently appearing in school textbooks. This paper provides historical context of Buson's life and what he was feeling when he wrote them. They share a similar spirit with "Shunpu Batei Kyoku" and are viewed as a turning point in his career. In writing the Haikus he developed a sense of confidence in his own talent, which became the driving force behind his creation. He also received inspiration from his hometown, aiding him in his literary process. Since his death 234 years ago, Buson's hometown has seen great changes, but aspects of Buson's origins remain. This paper discusses the stories behind his writings and how the haikus above captured his sense of home.

Key words: the Buson's three most well-known Haiku, hometown, Yodo River, Kema Village, "Shunpu Batei Kyoku", nationally famous Haiku, behind (of the Haiku)
蕪村の代表的三句、故郷、淀川、毛馬村、春風馬堤曲、国民的俳句、俳景

【はじめに】

本年（2017年）3月21日、国立極地研究所、国文学研究資料館、京都大学等の研究者グループが、藤原定家の日記『明月記』¹に記載されている「赤気」²についての研究結果を発表した。赤気は「赤いオーロラ」のことであり、それが科学的に証明できたと発表した。

建仁四年正月十九日・廿一日（1204年2月21日と23日）の『明月記』には具体的かつ詳しく述べられている。ようするに都の北から北東の夜空に赤気が連続して現れたことが記載されており、定家はその感想として「山の向こうに起きた火事のように、重ね重ね恐ろしい」（毎日新聞2017年3月22日に日付けを参考引用）と述べている。中国『宋史』³の嘉泰四年正月癸未（1204年2月21日）付には、「太陽の中の黒点がなつめ囊のように大きくなった」と記載されていた。オーロラは太陽の高エネルギーが活発に活動したときに見られる現象で、その様子が記載されている古典籍が研究材料になっている。研究者グループは次のように述べている。

過去の研究で、『明月記』と『宋史』、それぞれの文献についての調査はなされていましたが、今回、2つの文献の記録を突き合わせることで、約800年前の“ハロウィンイベント”が「地球での現象」と「太陽の現象」の両面から再確認されました。つまり、定家の見た「赤気」は見間違いではなく、確かに太陽の異常を反映して日本の空にオーロラが出ていたことが、科学的に追及され、確かめられたこととなります⁴。

また、以下のように研究の意義を述べている。

定家の見た連夜の「赤気」と、中国の観察された大きな「黒子」は、過去最悪の宇宙環境調べる重要な手がかりが800年前にも存在することを気づかせてくれました。さらに、当時の地球を生きた樹木は太陽活動のリズムを教えてくれました。文献と年輪と宇宙との三位一体の形で、こうした発見に繋がったのです。また、このような研究は、自然科学という、異分野の研究者が密接に協力して初めて実現できるものです。本研究で得られた結果は、科学的には、将来起こりうる最悪の宇宙環境を理解し、予測し、「宇宙災害」への具体的な対策を立てる上で重要です。また、人文学的側面としては、過去の宇宙環境が解明されことで、古典籍の読み方も変わってくる、つまり、当時の人々の天文観へのより深い理解に役立つことが期待されます⁵。

「トロイの遺跡」の発見は、ハインリッヒ・シュリーマン⁶がホメーロスの『イリアス』⁷を読み込み、ヒサルクの丘にあると推定した事は有名な話である。文献や伝説、言い伝え等から様々な発見に繋がった話は枚挙に暇がない。『明月記』の「赤気」（オーロラ）の話は人文学と現代科学の融合的研究の成果に違いない。定家の「赤気」に対する驚きと恐怖の原因を800年後に証明されたことは喜ばしい。

では、234年前に亡くなった蕪村の事はもっと詳しく分かっても良いのかもしれない。しかし、そう簡単には行かない。感情や感性にかかわる芸術分野の真実性を如何に論及していくかは難しいことだ。本人の論述（発言）でさえ、そのまま鵜呑みにはできない。諸文献や幅広い状況証拠を積み重ねながら、その妥当性の判断を下していかなければならない。

蕪村の作品を考える時もそうである。絵画であれ俳句や詩であってもそうである。蕪村が関わった様々なもので、今日とあまり変化がないものはなんであろうか。それは山や川や海という自然かもしれない。蕪村が生まれた毛馬村⁸や淀川を如何に捉えてきたかを考えると、彼の心の^{ひだ}襞が読め、その心の目を通した俳句の風景、すなわち蕪村の俳景⁹と人生が見えてくるのである。

[1] 蕪村の故郷、毛馬・淀川の風景への想いが醸し出されている句

蕪村詩の中で「春風馬堤曲」¹⁰は近代以降から今日まで特に評価の高いものである。ある日、蕪村の心中に興が湧き突然成立したものではない。この詩を創作する蕪村の故郷への想いは、長年に渡って心の中で育まれ熟成されたものがあつた。この故郷毛馬や淀川への想いが醸し出されている句を下記に抽出した。句の抽出は『蕪村全句集』(2002年(株)おうふう 発行)から行った。振り仮名は現代仮名遣いで読み方を示した。

父母のこののみおもふ秋のくれ	明和5年(1768年)	53歳
^{かげろう} 蜻蛉や村なつかしき壁の色	明和5年(1768年)	
^{いかのぼり} 几巾きのふの空の有り所	明和6年(1769年)	
渡し場や片足ぬらす春の水	明和6年(1769年)	
春の水山なき国を流れけり	明和6年(1769年)頃か	54歳
これきりに ^{こみち} 径尽きたり芹の中	明和6年(1769年)	
菜の花や和泉河内へ小 ^{いずみかわちこあきない} 商	明和6年(1769年)	
朝霧や難波を尽す難波橋	明和6年(1769年)頃か	
朝霧や ^{ぶんごはし} 糸のころひとつ豊後橋	明和6年(1769年)頃か	
^{こうもり} 蝙蝠や佐田にとまれと夕かな	明和7年(1770年)頃か	55歳
おぼろ月大河をのぼる御舟かな	明和9年(1772年)	57歳
なのはなや ^{まや} 魔爺を下れば日のくるゝ	安永2年(1773年)	58歳
菜の花や月は東に日は西に	安永3年(1774年)	59歳
かの ^{とうきゆう} 東阜にのほれば		
花いばら故郷の路に似たる哉	安永3年(1774年)	
愁ひつゝ岡にのほれば花いばら	安永3年(1774年)	

路絶えて香にせまり咲く茨かな	安永 3 年 (1774 年)	
<small>とまごね かいつくろ</small> 苦船を 刷 ひぬはるの雨	安永 3 年 (1774 年)	
<small>おぼろ</small> 朧 月蛙に濁る水や空	安永 3 年 (1774 年)	
<small>ひぐれ ひぐれ</small> 日暮 ～ 春やむかしのおもひ哉	安永 3 年 (1774 年)	
岸根行帆はおそろしき若葉哉	安永 3 年 (1774 年)	
うぐひすや堤をくだる竹の中	安永 4 年 (1775 年)	60 歳
<small>はくばい かんぼ こうろ かん</small> 白梅や墨芳しき鴻臚館	安永 4 年 (1775 年)	
橋なくて日くれんとする春の水	安永 4 年 (1775 年)	
懐旧		
遅き日のつもりて遠きむかし哉	安永 4 年 (1775 年)	
若竹や橋本の遊女ありやなし	安永 4 年 (1775 年)	
暁の雨やすぐろの薄原	安永 5 年 (1776 年)	
<small>かつらざきん</small> みじか夜や葛城山の朝曇り	安永 6 年 (1777 年)	62 歳
さみだれや大河を前に家二軒	安永 6 年 (1777 年)	
山 ～を低く覚ゆる青田かな	安永 6 年 (1777 年)	
さみだれや鶺鴒さへ見えなき淀桂	安永 6 年 (1777 年)	
<small>あお つ にごりみず</small> さみだれや滄海を衝く 濁水	安永 6 年 (1777 年)	
<small>ゆききまち</small> 往来待て吹田をわたる落ば哉	安永 6 年 (1777 年)	
洪水を見てかへるさのほたるかな	安永 7 年 (1778 年)	63 歳
ほたる飛 <small>り</small> や家路にかへる蜷 うり	安永 7 年 (1778 年)	
淀船の棹の雫もほたるかな	安永 7 年 (1778 年)	
窓の灯の佐田はまだ寝ぬちどり哉	安永 7 年 (1778 年)	
<small>げんぼち</small> 源人をわたりてうめのあるじかな	安永 9 年 (1778 年)	65 歳
妹が垣根さみせん草の花咲ぬ	安永 9 年 (1778 年)	
池と川ひとつになりぬ春の雨	天明 2 年 (1782 年)	67 歳
春雨の中を流るゝ大河哉	天明 2 年 (1782 年)	
<small>はんこう しゃじつへんうん</small> 半江の斜日片雲の時雨哉	天明 2 年 (1782 年)	
菜の花の黄なるむかしを青田かな	天明 3 年 (1783 年)	68 歳
<small>むしろ</small> 筵 帆に香をうつし飛ぶ岸の梅	年代不詳	

これらの全ての句が淀川とどのようにかかわっているかの検証はまたの機会にしたいが、いくつかの句を例にして蕪村句と毛馬と淀川の間を考察する。毛馬堤の蕪村生誕地の句碑¹¹ 辺り（明治の新淀川≪守口から大阪湾河口に至る約 16 km≫の開削工事で毛馬村は現在の淀川の河川敷辺りになっている。句碑はその近くの堤防上に建てられている。新淀川は明治 30 年着工し明治 43 年に完成している。）に何度も立っているうちに、「あ！比叡山が見える」と驚いたこ

とがあった。空気が冴えて見通しの良い日であった。この話を何人かの友人に話すと、皆一様に「嘘やろ！」と返ってきた。ほとんどはいわゆる地図的観念からそう思うのである。

しかし実際はそうではない。確かに見えるのである。以降何度も確かめに毛馬堤に出かけた。間違いなく比叡山¹²は見えるのである。地図上でも確かめてみた。毛馬と比叡山は実に面白い位置関係にあった。天王山と男山の間を誠にうまく潜り抜けるように位置しているのである。高い山等の障害物はないのである。また、地平線の数学的計算をしてみた¹³。比叡山は大比叡(843.3m)、四明岳(838m)の二峰からなっており、毛馬堤から比叡山までは直線距離で50~60km程度であり、計算上約100kmの距離まで見えるので、見えて当然であった。多分、毛馬で住んでいる人にとって何を今さらということであろうが、地図上にしかイメージのない者は比叡山が見えるのは驚きでもあるのだ。(本頁左図写真は毛馬の蕪村句碑から比叡山をズームで撮ったもの)

また、蕪村は絵における落款名をこの比叡山四明岳に由来する「四明」を、印記では「四明山人」を当初から使用している。寛保2年(1742年)27歳の下総結城時代¹⁴は「子漢」「四明」「浪華四明」、寛保3年(1743年)28歳~寛延3年(1750年)の35歳時代は「浪華長堤四明」の落款名を使用している。(1754年~1757年、丹後時代¹⁵の宝暦4年~7年以降は「四明」の入った号は使用していない)

これら諸号には、蕪村の郷里毛馬に因んだものが非常に多い。(4字略) 一例をあげると、四明山人は関東時代など初期に用いた号であるが、毛馬堤へのぼると淀川の上流、すなわち東北に京の比叡山四明嶽が見えるのである。彼はこの峰を見つて成人した、その思い出である。
(『蕪村と俳画』 1997年9月10日 八木書店 6頁)

と岡田利兵衛は述べている。蕪村自身が付けた各号は、蕪村が故郷を出てからも、故郷に対する愛着を持ち続けていたことを裏付けるものであった。蕪村は幼少年時代、霊峰比叡山の四明岳を遠く仰ぎ見ながら過ごした。「四明」という落款名を付けたこと自体が故郷への思いの深さを物語っている。他に毛馬から見える風景に因んだ号に、落款としては東成居士、浪華(花)長堤、淀南、馬塘、があり、印記では四明山人、東成がある。俳諧では蕪村である。これらから見ても改めて蕪村の故郷への愛着と執着を感じさせられる。



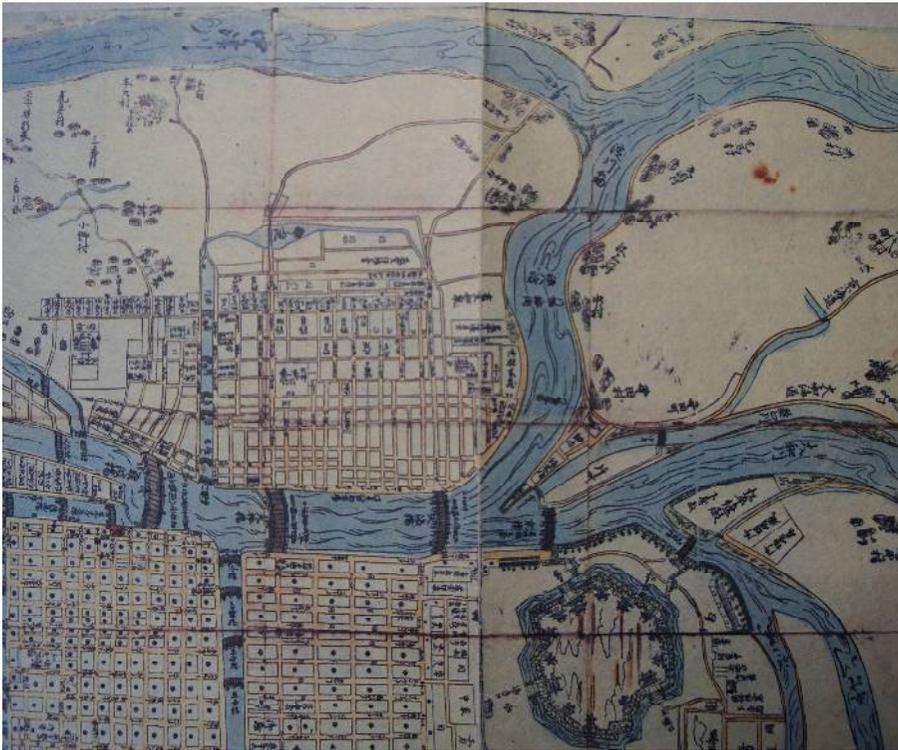
(2014年2月7日 筆者撮影) 毛馬・蕪村生誕地碑前
堤の先の山は比叡山。裸眼でもはっきり見える。



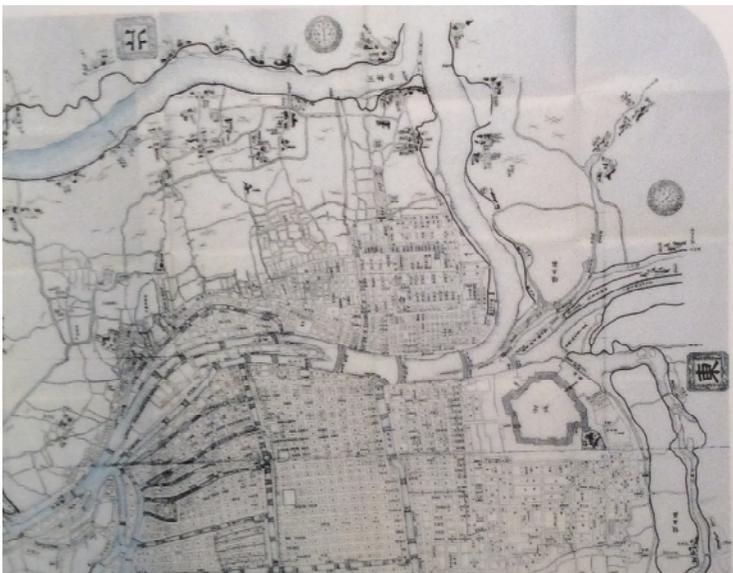
(2015年10月 筆者撮影) 淀川・毛馬堤の蕪村
生誕地にある「春風や堤長うして家遠し」の句碑

[2] 蕪村句「春の水山なき国を流れけり」の風景

北



「新撰増補大坂大絵図」元禄四年（1691年）部分 2017年10月16日 撮影
(大阪府立中之島図書館蔵) 上が北。毛馬村、中津川、等が描かれている。



「両図とも毛馬は
二つに川が分流す
る右側集落辺り。」

天明9年(1789年)
「大阪地図」
(国土交通省
淀川河川事務所提供)
2017年10月16日撮影

北



「明治18年 京阪地方仮製2万分の1地形図」(大阪府立中之島図書館蔵) 左下が大坂市内。淀川は大きく蛇行して流れていた。毛馬は二つに川が分流する右集落辺り。大阪市郊外の毛馬村周辺は田野が広がっていた。



赤川寺の案内板に掲載されている淀川改良工事地図。明治18年の陸軍実測地図を基に描いている。この時、毛馬村(分流辺り右集落)が河川敷(底)になった。



(2015年10月 筆者撮影) 毛馬閘門
右側河川敷(底)に旧毛馬村があった所。

① 春の水山なき国を流れけり 蕪村 明和6年（1769年）頃か

この句について正岡子規は内藤鳴雪^{めいせつ}¹⁶とかなりの時間を費やして論議している。子規にとって記念すべきものとなった蕪村の句と言える。子規が写生の精神に目覚め始めた時の嚆矢的な句である。また俳論の材料となった大事な句である。子規はこの句の解釈と鑑賞の論議を通して、蕪村句の評価の基準を、すなわち「写生」精神の重要性を己の中に固めていくのである。鳴雪はこの句を蕪村の句の中で代表する佳句としたが、子規はそうは思はないことを主張した。子規の考えは明治27年8月6日、7日付けの新聞「日本」¹⁷に「地図的観念と絵画的観念」として掲載されている。子規のこの句に対する考えの主たる部分を以下に記す。

此の句意単に目前の有形物を詠じるに非ずして、却て無形の理窟を包含するが如く、従つて人の感情を起さしむる事少しと云ふにあるなり。『山なき国』とは文学的客観の景象非ずして地理学的主観の抽象に似たるなり。作者の意は固より目前の景を吟じ出だせるものにして、故らに抽象的の語を為すには非るべしと雖も而も此語法は抽象的に組成せられるかの嫌あり。（略）『山なき』といふ一句を以て『国』の性質を現はすに至りては、一目の下に直ちに認得すべき光景に非ず、首を回らして四方を顧視したる後一脈の山嶺をも見ざれば、則ち其時に其事実と『国』の観念とを合して始めて『山なき国』と云ふ抽象的の観念を作るか、又は曾て詠みにし地理書を想起して山嶺なき国名を考え出だし、而して後に再び其国の光景を心中に再現（若しくは心中に創造）するか二途に出でざるべからず。何れにして聯想上幾多の時間を費やすを以て、直接に読者の感情に訴へ、其光景をして眼前に躍出せしむるに至らざるなり。（精密に言へば全く心象を起さざるに非ず。只々其明瞭の度を欠きたるなり）」¹⁸

子規は「山なき国」の語に拘泥して自己の考えを述べている。まず、文学的客観性がなく地理学的である。実際に周囲を見渡して、「国」の観念とを合わせて考えたものである。また地理書を見て想像したもので、心象（イメージ）を描くのに時間がかかり、読者に詠んだ時の光景を即座にイメージ化させることが出来ない。要するにリアリティ性に欠ける句と強く主張している。

子規は明治27年3月、画家の中村不折^{ふせつ}¹⁹との出会いから「写生」の大切さを学びつつある時期であった。そして精力的に郊外散歩をして俳句を詠んだ時期でもあった。俳句は詠みあげた時、情景が即座に出てこなければならない。すなわち「絵画的」でなければならない。「写生」でなければならないと強く考え始めた時期でもあった。それゆえこの蕪村のこの句についての子規の評価は低かった。しかし、この句が淀川の流れのどこかをイメージをしているとしたら、また、例えどこの大河にあたる堤に立った時のことを想像しているとするならば、子規の言う地図的観念の句ではなく絵画的観念の句である。毛馬堤の蕪村生誕地の句碑辺りに何度も立

ってみると、やはり子規の評とは違うものを感じるのである。どちらかと言えば、蕪村のこの句は素直に淀川の毛馬堤辺りに立って周囲を眺望した句であり、「なるほど」と納得する方がしっくりくる。

子規は残念ながら淀川の毛馬辺りの堤には立った経験はない。(ただし、鉄道で大阪駅に降り立っているから淀川は見ている。明治28年10月、現在は豊中市にあるが、当時、中津にあった東光院 萩の寺で「ほろほろと石にこぼれぬ萩の露」と「僧もなし山門閉じて萩の花」の句を詠んでいる。) 毛馬辺りの淀川の流れは日本では大河の様子を呈していると思う。ゆったりと滔々とした流れなのである。春霞が少し濃いめであれば周辺の山々は霞んで見えないか、本当にうっすらにしか見えないのである。春霞の頃、筆者自身も大阪湾の真ん中にいけば海原以外何も見えないことは何度も経験した。同じように春霞の滔々とした淀川の流れの他に自然物は見えないのである。田畑の青々とした広がりの中に淀川は大きく湾曲し流れているのである。「春の水山なき国を流れけり」のように淀川の流れは確かに蕪村の時代にもあったのだ。

「霞」^{かすみ}は文学的表現である。気象庁の定義では視界100m未満は濃霧、1km以下は霧、1km以上10km未満は霧^{もや}²⁰としている。霧程度の霞んだ状態は春にはよくあることだ。どちらにしても10km以下の視界である場合は毛馬からはほとんどの山々は見えない。現実として「春の水山なき国を流れけり」の風景は理屈なく実景としてある。

毛馬は河内平野(大阪平野)の真ん中とも言える地である。元禄4年(1691年)に出版された「新撰増補大坂大絵図」と明治18年発行の「京阪地方仮製2万分の1地形図」を比べてみると(前掲地図参照)、毛馬周辺、いや大坂を含めて大きな変化はないのである。具体的に言えば中之島より北、天満宮や現在の造幣局辺りより北では村落はまばらである。江戸時代の人口推移を見てみると(鬼頭宏の説)²¹、幕府の調査人口は1721年では31,278,500人で、1846年では32,297,200人である。また、1872年(明治5年)の壬申戸籍^{じんしん}では33,110,825人である。

江戸時代は1639年の島原の乱以降、幕末までの約220~230年間大きな戦がなく、概ね平和な時代の人口はほぼ一定していた。それを裏付けるように市街区や村々の在り方はほとんど変化していないのが分かる。毛馬村周辺は田野が大きく広がる地域であった。淀川(当時は毛馬辺りで大川と中津川(長柄川)に分流していた。)はその中をゆったりと流れていた。当時の毛馬の人々はもっと実感的に「山なき国」のイメージを抱いたであろうことが分かる。

春霞の河内平野はまさに「山なき国」である。現在よりはるかに田野の中に自然の滔々とした淀川の流れがあった。もちろんこの句の風景が淀川の毛馬周辺のことだけを詠じたものとは言いきれない。結城をはじめ関東地方のどこかかもしれない。もっとも、この句の成立時は蕪村54歳、明和6年(1769年)で讃岐地方に行き来していた。したがって淀川を何度も三十石船²²で毛馬辺りを通っているから淀川をイメージしていたと考える方が妥当であろう。

船上からの風景は堤が遠景を断ち切り、余程の高い建物であるか、生駒山の山頂部分しか見えない。筆者自身、子供の頃見た景色もそうであった。現在は高層の建物の上部は見えるようになったが、場所によっては蕪村が見た景色と変わらない所もある。淀川の川端に立ってみれ

ば分かることだ。淀川本流の流れの中にある三十石舟から見える景色は、実に広々とした空間の世界なのである。蕪村の中にある淀川の景観は広々とした平野の中に大きく蛇行しながらゆっくりと滔々として流れる大河なのである。

また、実際に春霞の頃に毛馬の蕪村生誕地の碑辺りから淀川の風景を見ながらこの句を味わってみると、確かに「山なき国」を淀川は流れていたのだと実感するのである。次の写真は大阪工業大学16階ラウンジからの眺めである。霞んだ状態であれば山々はほとんど視認できない。また、蕪村の時代は建造物はほとんどなく、田畑が広がっていた。起伏のほとんどない平野の中を大きくうねりながらゆったりと流れていた風景は容易に想像できる。毛馬はここから3, 4 km下流にあたる場所である。



(2015年11月 大阪工業大学16F ラウンジより筆者撮影) 写真を組み合わせ、淀川沿いのパノラマ写真を作成。

比叡山から北摂連山、六甲山、毛馬（左端辺り）、大阪湾方面を望む。

蕪村生誕地の句碑辺りからは、遠くの比叡山が見えること、もちろん、普段は大阪平野（河内平野）を圍繞するように多くの山々が見える。六甲連山、北摂の山々、生駒連峰に二上山、葛城山金剛山、和泉葛城連山等、決して「山なき国」ではない。それどころか、それらの山々と親しみ暮らしているのが大阪の人々である。蕪村も二十歳近くまで毛馬村で暮らしていた。伏見の門人宛²³の手紙で「余幼童之時、春色清和の日ニは、必友どちと此堤上ニのぼりて遊び候」と述べているように、子供の頃は毛馬堤上で遊んだのだから、堤上から山々が見えることは常識として知っていたであろう。また、天候によっては山々が見えない日もあることも当然として知っていたとするのが極めて妥当であろう。大きくうねりながら滔々と流れる淀川の風景は蕪村にとっての原風景でもあった。このバックボーンがなければ「春風馬堤曲」の成立はあり得ないと思われる。

淀川を詠じた詩歌は古今にいくらかでもあるが、淀川下りをモチーフにした近世末の詩人、藤井竹外²⁴（高槻藩士 1807年～1886年）の七言絶句がある。

花朝下澱江	（花朝澱江を下る）
桃花水暖送軽舟	桃花水暖かにして 軽舟を送る
背指孤鴻欲没頭	背指す孤鴻 没せんと欲する頭
雪白比良山一角	雪は白し比良山の一角
春風猶未到江州	春風猶未だ江州に到らず

この詩は竹外が26歳(1832年2月15日)の時に詠じたものだ。詩の解釈は比較的分かりやすいので割愛するが、ここで注目したいのは「雪白比良山一角：雪は白し比良山の一角」の転句の部分である。承句は「(水鳥が空の彼方に消えそうとなる)であり、そのあたりに比良山の一角が雪で白く輝いて見える」と転じて詠じるところである。この部分は完全に想像の部分で、実際には比良山は見えない。高槻辺りの淀川から見えるのは比叡山である。作者竹外は当然知っている訳だが、なぜ、そのような表現をしたのであろうか。早春の時期に山頂部分に雪を冠しているのは比叡山よりも比良山の方に現実性が高い。したがって早春のイメージを強く出すためには比叡山よりも比良山の方が印象深いことを土地の者として良く知悉していたからであろう。詩の創作においてはこのような事はよくあることである。

例えば芭蕉にもある。「荒海や佐渡に横たふ天の川」²⁵も現実の即して見ればこのような景色には見えない。芭蕉のフィクションの作品と評されている。また、島崎藤村の代表詩「千曲川旅情の歌」²⁶でもそうである。詩句を素直に読めば冬枯れの景色であるが、読者の多くが春の景色をイメージする。この仕掛けに藤村の手腕があったとする評もある。とくに詩歌においてはこのような事は特殊なことでもない。

ところで、それを承知で蕪村の「春風馬堤曲」を読み直してみると、かえって淀川のリアルな各所の映像が彷彿と湧いてくるのである。蕪村の「春風馬堤曲」も竹外のようにフィクションを大胆に入れて詩作をしていたのであろうか。むしろ逆であったようだ。毛馬を含む淀川各所の景観のイメージが湧くところに「春風馬堤曲」の味わいがあるのだ。

蕪村の生い立ちは現在でもほとんど詳らかにされていない。毛馬村で二十歳ぐらいまで育ったことはほぼ確定されている。本妻の子供でなかったことも分かっており、また、単なる使用人の子供であるという説もある。複雑な家庭環境であったことは確かである。

小林一茶にも蕪村と同じ様な環境があり「ふるさとや寄るもさわるも茨の花」(句意：故郷に帰ってきたが、誰もかれも皆棘のある茨の花のように私に快く接してくれない。)という句を詠んでいる²⁷。

室生犀星にも似た環境があり、「ふるさとは遠きにありて思ふもの そして悲しくうたふものよしや うらぶれて異土の乞食となるとても 帰るところにあるまじや [小景異情-その二]」と詩っている²⁸。彼らはともに故郷に対する複雑な思いを詩句に託して表現している。

石川啄木の場合は家庭環境は異なるが、故郷に対してはやはり複雑な思いを歌に託している。「石をもて追はるるごとく ふるさとを出でしかなしみ 消ゆるときなし」はその代表歌²⁹である。

一方、蕪村の淀川に関わる俳句や「春風馬堤曲」を始めとする詩中にそのような想いがあるだろうか。むしろその反対の想いの方が強いのではないか。どうしてであろうか。それはやはり蕪村の故郷毛馬村は、大きくうねる大河である淀川と共にあったからであろう。まさに「春の水山なき国を流れけり」のイメージは淀川に適っているのである。

[3] 蕪村句 「菜の花や月は東に日は西に」の風景

「春の水山なき国を流れけり」のイメージと共通する句と重ね合わせて考えてみると、蕪村の故郷の原風景が一層明らかになる。その句は蕪村句ではもっとも人口に膾炙されているものである。

② 菜の花や月は東に日は西に

この句は摩耶山^{まや}³⁰（神戸市灘区）に訪れた時のものとされている。すなわち、毛馬堤から見た風景ではないとされているが、容易に毛馬から見える世界だとも分かる。蕪村がこの句を詠じるための参考にした先行作品はいくつかあるとされている。陶淵明の「白日^ひ³¹³²³³西阿^あ素月出^い東嶺^{とう}」（雑詩）、李白の「日^ひ西^{せい}月^{げつ}復^ふ東^{とう}」（古風）、柿本人麻呂の「東の野にかぎろひの立つ見えて顧みすれば月傾きぬ」（万葉集）、「月は東に昂は西に いとし殿御は真ん中に」（山家鳥虫歌・丹後）などである。また、「其角の『稻妻やきのふは東けふは西』（其角・蕪村の書簡）を念頭にあったと言われている」（『蕪村秀句』 66頁 永田龍太郎 1991年6月28日 永田書房）という説もある。また山下一海はこの句については次のように評している。

月と太陽を東西、もしくは西東に見るという発想は、漢詩にもあるし、万葉の歌にもあり、民謡にもあるが、これはそのどれに拠ったというより、それらのすべてを受けているのだろう。そこに〈菜の花〉を取り合わせているところがいかにも俳諧であるし、それによって大きな春景となっているところが新鮮である。

（『白の詩人 - 蕪村新論』103、104頁 ふらんす堂 2009年3月24日）

蕪村がそれらを思い浮かべながら作句したとしても、菜の花と月と太陽（夕日）の取り合わせの風景は、幼童のころから出郷（二十歳頃）に至る日々には何度も見た毛馬の風景でもある。

科学的に理解すれば東に月が上がり、同時に西に日が沈むのは満月の日である。この句は前書として「三月廿三即興」とあり、安永3年（1774年）3月23日（現在の暦では5月3日頃）に詠まれたことになる。そうするとその日は、月の輝面率が「0.494」で全く満月ではない。（前年の安永2年〈1773年〉にも初午の日、現在の暦では3月22日に摩耶山に訪れている。この日も東に満月は見えない。）安永3年1774年の満月の日は旧暦の3月10日～15日（現在の暦では4月20日～25日頃）である。実際に月の輝面率が「1」、すなわち満月の日となるのは1774年4月26日である。摩耶におけるこの日の「月の出」は18：31、「日の入り」は18：41である。毛馬におけるこの日の「月の出」は18：31、「日の入り」は18：38である。摩耶、毛馬とも輝面率は「1」である。科学的（天文学的）に分析しても、東（103度）から満月が昇り、太陽は西（287度）に沈みつつあるところである。両者はほぼ180度の位置関係（満月と太陽の位置関係はほぼ180度の位置にあるのは天文学的常識である）である。一直線上に満月と太

陽が同時に空に浮かんでいる時間は約7分間ほどあったわけである。この日であれば、この句の解釈「見渡す限り菜の花が広がる夕方、東の空には上がったばかりの月が、そして西には沈みかけた夕陽があるばかりの春らしい光景」（藤田真一・清登典子編 『蕪村全句集』116頁（株）おうふう）のような景色があったと言える。

「菜の花や月は東に日は西に」の句の前書にある「三月廿三即興」は現在の5月3日頃であるから、そうするとこの句はどこかで見た菜の花畑の満月の風景を想像して詠んだものであることが分かる。すなわち10日ほど前に見た風景であろうと思われるが、先行作品にもいくつか同じようなものがある。しかし、十分に毛馬辺りの風景を想像したことも推察される。では、摩耶山麓周辺と毛馬とどちらがこの句のイメージに近いかというやはり毛馬であると思われる。というのは摩耶山麓では西側は山が迫っており、東から満月が昇っていくというイメージはできても、とても夕陽が沈み行くはるけさをイメージできない。また同時的に満月と太陽を見ることは難しい。その点、毛馬では満月が昇る生駒山上方面と、沈む太陽の六甲山方面を一直線上に結ぶほぼ真ん中にあたるので、昇る満月と沈みゆく太陽を同時的に見る事ができる地理的位置にある。



上掲図、は毛馬（赤丸印）を中心とした「1774年4月26日、月の出、日の入り状況」。下掲図は、摩耶山麓（赤丸印）を中心とした「1774年4月26日、月の出、日の入り状況」。赤線は

日の出・日の入り、黄線（少し黒く見えるが）は月の出、月の入りの凡その方向をそれぞれ示している。北海道大学情報基盤センター (http://www.hucc.hokudai.ac.jp/online_database.html) の情報システムを活用して研究されている、佐賀大学の竹下幸一氏の「暦情報データベース」から得た資料を基に、Google マップ上（2017年10月16日11時頃に掲出）に筆者が赤線、黄線を書き加えて凡その図を作成した。



『浪華の賑ひ』の「菜花盛」文久3年（1863年）（大阪府立中之島図書館所蔵）2017年10月16日撮影



『淀川兩岸一覽』³¹の長柄三ツ頭・長柄川の部分 文久元年（1861年）毛馬村側からみた、淀川・長柄川の風景。上掲絵図方面を描いている。「国土交通省 淀川河川事務所提供」 2017年10月6日撮影



(2015 年 10 月 筆者撮影) 毛馬開門、淀川大堰を淀川右岸側より撮影。正面は旧毛馬村あたり。



(2015 年 10 月 筆者撮影) 長柄大橋付近より淀川（旧長柄川。中津川ともいう）

また、当時の毛馬周辺の春は菜の花畑であったことは古絵図で証明できる。例えば 1863 年（文久 3 年）、暁鐘成著、松川半山画『浪華の賑ひ』³²に掲載の「菜花盛」は、長柄辺りの黄色い菜の花畑の様子を描いている。（59 頁参照）長柄は毛馬村の対岸にあたるが、まさに 指呼の距離にある。「菜の花や月は東に日は西に」の風景は、蕪村が子供の頃から見続けてきた毛馬周辺で見た風景でもあった。毛馬堤に立てば 360 度の眺望が開ける。春は菜の花畑が一面に広がっている。その空間は幼少年時の蕪村に自然空間の大きさを感じさせるには十分でもあった。蕪村の空は広がっていた。菜の花も月も太陽も身近にあった。毛馬の淀川堤は現在でも大きな空間を感じさせるところである。幼童の頃から青年期をこの自然環境の中で育ったことは蕪村にとって大切なことであった。「菜の花や月は東に日は西に」の句は、蕪村が幼少の頃から見た一つの原風景であり、天文を扱った雄大な句とも言える。そして毛馬をイメージするにふさわしい代表的な句ともいえる。



蕪村の句碑「菜の花や月は東に日は西に」

(2014 年 9 月 筆者撮影) 大阪梅田茶屋町



蕪村の句碑「菜の花や月は東に日は西に」

(2014 年 4 月 筆者撮影) 茨城県結城市久保田



(2014年4月 筆者撮影)

結城市久保田の蕪村句碑前の鬼怒川河畔。ここに蕪村の句碑（前頁下右写真）

蕪村は月を愛でるのではなく、月の動きを捉えるのが好みようだ。安永6年（1777年）、嵐山の渡月橋³³で詠んだ句もその例である。

月光西にわたれば花影東に歩むかな

蕪村

「花影上^ニ欄干^ニ、山影入^レ門^ニ」など³⁴、すべてもろこし人の奇作也。されど只一物をうつしうごかすのみ。我日のもとの俳諧の自在は、渡月橋にて」という前書がある。王荊公（=王安石：1021年～1086年の先行作品「花影上欄干」を踏んだものである。この句も前掲句と相通じるものがある。前書きで「俳諧の自在」³⁵と述べる蕪村には、俳諧宗匠としての意気込みと、俳句精神の在り方に対する考えがある。その考えを

「中国の詩人たちは、じつに美しい表現で春夜の詩境をうたっているが、その中で動いているのは、『花影』とか『山影』といったひとつのものにすぎない。ところが、わが日本の俳諧だと、同じ情景を描いても、『月光』、『花影』というふたつのものの動きを、わずか十七文字で自在にとらえることができるのではないか、というわけである」

（『月は東に 蕪村の夢 漱石の夢』101頁 森本哲郎 1992年7月5日二刷 新潮社）

と、森本哲郎は蕪村の意識を推し量っている。また、王岩（ワン イェン）も「その前書きは、漢詩を生かしながらも、漢詩に対抗する俳諧師蕪村の自負心を窺い知らしめる。ここで蕪村は漢詩より『我日のもとの俳諧の自在』を声高に唱えていた」と述べている。（『与謝蕪村の日中

比較文学的研究』151頁 和泉書院 2006年1月28日) 蕪村が俳諧の重要なスピリッツとして「俳諧の自在」であることを世に表したものである。

「春風馬堤曲」はまさにこの「俳諧の自在」を實踐したものである。ではこの「俳諧の自在」とは如何なるものであろうか。「俳諧の自在」に通底する意識とは蕪村の「離俗論」である。門人、黒柳 召波くろやなぎしやうはの著した『春泥句集』しゅんでい³⁶の序に掲げられている。この論は召波が蕪村に対し俳諧について問いかけて、蕪村がそれに対して答えるという問答形式で書かれたものである。まず、召波が「俳諧とは何か」と問うたところ、蕪村は次のように答えた。

俳諧は俗語もちひを用て俗を離るゝを尚ぶ、俗を離れて俗を用ゆ、離俗もつともノ法 最 かつし、かの何がしのすなわち禪師が隻手の声を聞きといふもの、則 俳諧すなわち禅にして離俗、則也。…³⁷

蕪村のいう離俗とは「俳諧は俗語を用いながら俗を離れ、俗を離れながらも俗を用いなければならない」³⁸ことであり、「超俗でもなければ、脱俗でもない」³⁹のである。要するに「俗」な題材を使用しても、その「俗」なるものに染まらず、高い精神を心掛けことが肝心であると蕪村は述べるのである。「一種の包括的な弁証法である。詭弁ではない。これが理解できない人間には、蕪村の神髄は、いつまでも不可解なものと映ずるだろう」⁴⁰と瀬木慎一は述べている。また、小西甚一は次のように蕪村の「離俗論」について述べている。

蕪村によると、俳諧は、俗語によって表現しながら、しかも俗を離れるところが大切なのである。この離俗論は、画道から啓発されたもので、当時著名だった「芥子園畫傳」初集の去俗説を承け、俳諧を修行することは、結局、その人の心位を高めることによって完成されるのだと主張する。その実際的な方法としては、古典をたくさんよむことが第一である。古典のなかにこもる精神の高さを自分の中に生かすこと、それが俳諧修行の基礎でなくてはならない。古典と言っても、何も俳諧表現に関係のあるものだけに限らない。むしろ表現とは関係がなくても、人格をみがき識見をふかめるための「心かての糧」こそ、俳諧にとって一番大切なのである。蕪村の描く画についても、共通である。
(中略)

画をかくための修行として、画に関係のない古典をたくさんよむことが必要なのである。蕪村の俳諧は、それと同じ性格をもつ。

(小西甚一『発生から現代まで 俳句の世界』223頁・224頁 談社学術文庫 1999年7月23日 第8刷)

「離俗論」の提唱は明和5年(1768年)であった。「菜の花や月は東に日は西に」「月光西にわたれば花影東に歩むかな」の両掲句は、ともに「離俗論」以降の作品である。「漢詩」、『万葉集』、『山家鳥虫歌・丹後』等を取り入れた作品でもある。

とくに「月光西にわたれば花影東に歩むかな」の句は『春泥句集』が出版され「離俗論」が

世に出た年である。両掲句ともに、小西甚一達の解説に十分あてはまる内容を持っている。「俳諧の自在」精神を得るには、多くの古典に学ぶこと。また様々な修行を積んで見聞を広めること。それらを通して「離俗論」の精神に至ること。蕪村は体験的に「離俗論」の精神を学んだのである。

この「俳諧の自在」精神を俳画として典型的に表現されている作品は「花見句画賛」（年代不詳：晩年の作：みやこの花の散りかゝるは光信が胡粉の剥落したるさまなり。「又平に逢うや御室の花ざかり 蕪村」と賛と俳句が書かれている。）と『「学問は」賛自画像』（明和8年：1771年：書窓^{らんみん}懶眠「学問は尻からぬけるほたるかな 蕪村」と賛と俳句が書かれている。）である。両方ともに実にのびやかで自在に描かれ、蕪村芸術の一つの到達点を十分に垣間見れる作品である。（『「学問は」賛自画像』の掲載申請をしたが、個人蔵のため所蔵者に許可が得られなかったので掲載できなかった。）

二つの作品説明の紹介例のうち『「学問は」賛自画像』の評については下記に、「花見句画賛」については画像と共に次頁に載せた。晩年の蕪村の芸術的境地を端的に表現している。囚われない自由さと「自在」さの蕪村の精神を明確に感じさせられる作品である。俳諧における諧謔性や人物をみる目のやさしさと懐の深さ、それらが俳画の中に表現されているのである。故郷をイメージさせる俳句をはじめ、「春風馬堤曲」に登場する人物にも蕪村のそのような眼差しがある。蕪村はその人物たちの背景にある人間関係や自然の様子が自在に表現している。

蕪村の句、俳画に表現されている世界は、「離俗論」で培われた彼の自然で自在な心そのものと言える。「菜の花や月は東に日は西に」の句もそのような精神を背景(俳景)に詠まれているのである。

「^{らんみん}懶眠」は怠惰なものうい眠りのことです。ユーモラスな句に、心地よく眠る蕪村自身と思われる人物を描いています。懶眠する自身が学問をしても尻からぬけるは、蕪村のユーモラスな人となりを表しているようです。それを「ほたる」言うところが特にユーモラスで、しかもほたるの光がそのあたりを薄くひからせている美しい雰囲気を想像させてくれます。
（『芭蕉・蕪村 人と書と絵』54頁 逸翁美術館）

アインシュタインは「教育とは、学校で学んだことを一切忘れてしまった後に、なお残っているもの。そして、その力を社会が直面する諸問題の解決に役立たせるべく、考え行動できる人間を育てること、それが教育の目的といえよう。（Education is what remains after one has forgotten everything he learned in school. The aim must be the training of independently acting and thinking individuals who see in the service of the community their highest life problem.）」
（名言・格言『アルベルト・アインシュタインさんの気になる言葉+英語』一覧リスト）

http://iso-labo.com/labo/words_of_Einstein.html）という言葉のをこしている。

このアインシュタインの言葉と「学問は尻からぬけるほたるかな」の蕪村の句とを照らし合わせて考えてみると、両者の中に共通の想いを感じざるを得ない。一つの道を歩き続けた者の経験値であり感慨でもある。努力や精進を否定しているものではない。両者はそれらを通して

さらにその奥を極めるには一度フラットになって、フレキシブルな姿勢の中で自身が求めるものをしっかり見極めることの大切さを述べているのだ。アインシュタインは研究を、蕪村は俳諧と絵画を通して得た一つの境地であった。



左図の「花見句画賛」

(クレジット：公益財団法人 阪急文化財団 逸翁美術館蔵)

左の蕪村俳画の賛と句には

みやこの花の散りかゝるは
 光信が胡粉の剥落したる
 さまなり
 又平に逢うや御室の花ざかり
 蕪村

とある。又平は、近松の浄瑠璃「^{けいせいほんごうこう}傾城反魂香」の人氣者、浮世又平、人呼んで吃又^{どもまた}という絵師のことで、酒好きで踊れば吃らずに喋れるという、そんな人柄をこの絵は思わせます。酒を飲んで踊る又平の姿が洒脱ですね。(略) 文字もまた晩年の豊かな書き方です。書と絵と句が一体となっています。蕪村俳画の傑作の一つです。

(『芭蕉・蕪村 人と書と絵』56頁 逸翁美術館)

人物と瓢箪のみが描かれた画面の背景に満開の桜がイメージされ、この人物が春 風に舞う花びらの下を酒に酔い千鳥足で歩く姿をも彷彿される。詩書画一体 となった俳画の妙味を満喫させる作品である。

(『蕪村 その二つの旅』『蕪村展図録』140頁
 朝日新聞社 2001年)

[4] 蕪村句 「さみだれや大河を前に家二軒」の風景



大雨後の淀川。 河川敷上まで出水した。豊里大橋上流から毛馬方面を臨む。

(2013年9月16日 筆者撮影)



京阪守口市駅前の文禄堤（2015年10月 筆者撮影）

文禄堤は太閤堤とも称されており、豊臣秀吉が麾下の大名たちに造らせたという。現在ほぼ当時のまま残っているのは、京阪電車守口市駅前周辺だけである。橋下高が3.8mの標識から、当時の淀川の堤はその程度の高さであったと考えてよい。上掲写真の淀川の大水の状況であれば、洪水になっていたであろう。蕪村は何度も厳しい顔を見せる淀川を見て育ったのである。

③ さみだれや大河を前に家二軒

蕪村

「大河」の語が入る蕪村句では、これも人口に膾炙されている「さみだれや大河を前に家二軒」を取り上げて論述したいが、その前に「大河」なる語を使った蕪村の次の句を見てみる。

おぼろ月大河をのぼる御舟かな

明和9年（1772年）

「おぼろ月大河をのぼる御舟かな」の説明として「空には朧月が淡い光を放っている。大河には貴人の乗った舟がゆったりと遡っていく。王朝絵巻を連想させる夢幻の世界」（『蕪村全句集』52頁 2002年（株）おうふう 発行）とある。物語を発想の源として句を詠むのは蕪村の

得意技であるが、それだけではない。この句の大河は淀川をイメージしたものではないか。王朝絵巻の舞台として考えられる大河は『土佐日記』⁴¹でもしかり、能の「江口」⁴²の舞台としても淀川が出てくる。特に掲句も「大河をのぼる」とあるのは注目すべきだ。「春風馬堤曲」も遡行の道行である。近松門左衛門の代表作『曾根崎心中』・『心中天の網島』も、そのクライマックスは淀川及び淀川支流の遡行の道行である。ドラマの背景として淀川を遡行するシチュエーションは見落とせない。蕪村の中の淀川は大河としてイメージ化されているだけでなく、幼少の頃からどこかに彼特有のドラマの中の大事な背景として淀川が意識されていたとも言えるだろう。

一方で、「さみだれや大河を前に家二軒」の句がイメージする淀川の厳しい自然の姿も蕪村は頭の中でしっかり認識していた。蕪村は五月雨を厳しい自然の現実をもたらしものとして捉えていた。この句は安永6年(1777年)5月10日、夜半亭月並句会に出された句である。この年の2月には『夜半楽』にて「春風馬堤曲」が発表されている訳だが、前掲句をはじめ

さみだれや田ごとの闇と成りにけり
うきくさも沈むばかりよ五月雨
ちか道や水ふみわたる皐雨
さみだれに見えずなりぬる径哉
さみだれやあお滄海つを衝くにごりみず濁水(再掲)

などの句の他にいくつもの句がある。「五月雨」を扱った句はどこか暗いイメージがする。小西愛之助はその著書『俳諧師蕪村・差別の中の青春』(1987年1月20日 明石書店)で次のように述べている。

蕪村と五月雨の句の相関関係を考察する時、看過できないのは、蕪村の幼児体験である。蕪村の幼児体験の回想は、安永六年二月刊行の『夜半楽』に収められた「春風馬堤曲」に示された黄金の日々への回想のみではなく、その年の夏の『新花摘』には、「五月雨」の暗いトーンの回想がこめられているのである。この「五月雨」の暗いトーンは、とりもなおさず、蕪村の暗い過去体験への回想である。

蕪村の幼年時代をすごした「摂津国東成郡毛馬村」は、淀川下流に位置する低湿地地帯である。「毛馬」は、もともと「ケシマ」であり、淀川の下流に出来た中州の島であって、それがその後、土砂の堆積によって地続きとなり、中世には榎並荘の一部分としてくりこまれた。この榎並荘に所属した村落は、野田・中野・沢上江・善源寺・友淵・毛馬(略)・野江の二五カ村である。この榎並荘は近世に入って、貞享三年(1868年)には、東成郡に所属することとなった。ここに、毛馬村と同じく、旧榎並荘で、東成郡に所属した野江村の享保十年(1725年)の年貢免定(大森

英夫氏蔵）が存在する。野江村と毛馬村は極めて近接した距離にあり、淀川の洪水による水難に対しては、運命をともにしたことであろう。従って、次に示す年貢免定の水損に対する現実、若干の水損高及びその比率の相違はあるにしても、毛馬村いても大同小異の現実であったであろう。

（『俳諧師蕪村・差別の中の青春』150頁・151頁）

小西愛之助は淀川の持つ暗い部分について、さらに具体的に野江村の現実を、大森久治著『榎並と野江の歴史』を参考に分析して次のように述べている。（資料の表は割愛する）

この表で明らかのごとく、享保十年より享保十九年までの十年間において、水損の年は実に八年間もあったのである。むしろ水損のあることが常態とでもいうべき現象が、摂津国東成郡野江村には存在したのである。この現象は、蕪村が「幼童之時」をすごした毛馬村においてもかわりなかった。「春色清和の日ニハ、必友どちと此堤上にのぼりて遊び候」と記す、安永六年二月二十三日付の蕪村の書状の文面も確かに蕪村の幼童之時のひとつの現実であったのであろう。その春の日の回想は結晶して「春風馬堤曲」の作品こめられている。しかし、この毛馬堤は、「春色清和の日」のみではなかった。

（『俳諧師蕪村・差別の中の青春』153頁～152頁）

筆者も近所の図書館で『守口市史』を紐解いて調べてみると、水損に対する年貢免定の記録資料がいくつも掲載されていた。蕪村が生まれた享保元年（1716年）の資料も載せられていた。梶村の「申之年免定之事」（大西勝氏文書）という文書である。（『守口市史』291頁）梶村から野江村まで凡そ9km程である。毛馬村からでも凡そ8kmである。同じ低湿地地帯である。「享保十年より享保十九年までの十年間において、水損の年は 実に八年間もあったのである。むしろ水損のあることが常態とでもいうべき現象が、摂津国東成郡野江村には存在したのである」とする野江村の状況は、毛馬村でも梶村でも同じような状態であったことを示している。淀川水系の人々が常に洪水の危険に見舞われていた現実、多くの記録に残されている。蕪村は生誕時から十九歳前後の出郷するまでの多感な青少年時代に渡って、淀川の自然の厳しさも経験していたのである。

毛馬村も他村と同じく洪水の脅威に曝されていた。蕪村にはこの現実の印象をしっかりと記憶していたと言える。このような歴史的現実を背景に「五月雨」の句を解釈・鑑賞をするならば、蕪村の句の中に厳しい淀川のもう一つの顔を垣間見せ見せつけられるのである。蕪村の成長時代は、徳川吉宗が八代将軍になった享保元年から蕪村出郷の年、享保20年（1735年）頃にあたる。小西愛之助はこの時代を平和で穏やかな時代であったとする世間の一般的な評価と真逆の評価をしている。小西は吉宗の享保の改革は、1に「年貢増徴政策」、2に「賤民統制政策」の二本柱であり武士集団の救済政策であったと規定している。この政策は民衆にとって厳

しいものであった。その裏付けを小西は青木虹二『百姓一揆総合年表』から資料を引用して説明している。

それによると、吉宗時代の百姓一揆は317件、都市騒擾33件、村方騒動227件、合計577件も発生している。年平均19件である。年間20件以上になるのは、吉宗以前では宝永7年(1710年)のみで、吉宗の時代は12年間もある。特に享保17年(1732年)蕪村16歳の年は大凶作⁴³で一揆が30件も発生している。洪水等で水損になった年でも年貢は徴収されていた。享保10年(1725年)、蕪村9歳の年は大凶作の年であったが、野江村の資料では、村高681石2斗3升3合のところ、毛付高は77石5斗9升となった。毛付高とは実際の生育状況をみて収穫量を判断することであるが、このわずかな収穫に対して35石7斗9升2合が年貢として徴収された。野江村の農民には41石7斗9升8合しか残らなかった。当時の野江村の人口は516人であったので、年間、一人当たり8升1合ということになる。

野江村の人々はこれでは餓死してしまうしかない量である。当時のどのようにして生き延びたのであろうか。天領で同じような土地状況にあった毛馬村でもその状態は変わりなかったであろう。蕪村の号がこれらのことと無縁であるとは考えられない。しかし、小西の論を肯定しても、蕪村は故郷としての毛馬堤、淀川を懐かしく肯定的に捉えていたと言えるだろう。この蕪村と淀川の関わりについては森本哲郎も次のように述べている。

さて、蕪村であるが、この詩人の魂も深く淀の流れと結びついている。彼と淀川との交流は「春風馬堤曲」や「澱河歌」だけでなく、すべてにわたっているようにさえ思われる。

『淀川兩岸一覽』に記されているこの川のほとりの地名は蕪村の句のいたるところにあらわれるし、げんに、彼の人生そのものが、幼いころに育った毛馬の堤(馬堤)と京を結ぶ淀の流れでつづられているのである。

(『月は東に 蕪村の夢 漱石の幻』 215頁 森本哲郎 1992年7月5日2刷 新潮社)

蕪村にとって淀川や毛馬村は幼少時の思い出の中にだけあるのではなく、彼の人生の中に背骨のように精神の支柱になっていたと森本は考えるのである。蕪村にとっての故郷(毛馬・淀川)は彼の精神を支え続けたのである。「春風馬堤曲」はその集大成であるといっても過言ではない。そして、「春風馬堤曲」の成立背景は多くの俳句の先行作品が醸成したことも否めない事実である。また、それらの俳句の俳景を作り出したのは淀川であり、故郷毛馬村を取り囲む自然であったことも認識すべきである。本論の主旨はそのことに尽きる。

【注】

- 1 『明月記』：藤原定家（1162年～1241年）の日記。巻数不詳。漢文体。1180年～1235年（治承4～嘉禎1）の公武間の関係、故実、和歌などの見聞を記したもので、鎌倉時代の資料として貴重。京都冷泉家の時雨文庫などに大量の自筆本が現存。（『広辞苑第6版』）
- 2 『赤気』：赤色の雲気。彗星（すいせい）・超・オーロラのことともいう。平家物語（3）「彗星東方に出づ。蚩尤気（しゅうぎ）とも申す。また赤気とも申す」。明月記（建仁4年正月19日条）「乗燭（へいしよく）以後、北並びに艮（うしとら）の方赤気有り。…白光赤光相交り、奇にして尚（なお）奇なるべし。恐るべし恐れるべし」とある。
また、2017年9月20日付「毎日新聞電子版」によると、京都市伏見区の東羽倉家の日記からオーロラの記述を発見されたとある。1770年9月17日にオーロラが京都で見られたという記述がある古書『星解（せいがい）』を裏付けるものであった。当時のオーロラの様子を国立極地研究所が分析し再現した。『星解（せいがい）』掲載の図と東羽倉家の日記の記述は詳細であり、国立極地研究所は「古い地図や文章を活用し、これほど詳しく再現できたことは驚きだ」と述べている。
- 3 『宋史』：二十四史の一つ。宋代の正史。本紀47巻、志162巻、表32巻、列伝255巻。全496巻で歴代正史中、最も膨大。元の托克托（トクト）すなわち脱脱らが勅を奉じて撰。1345年成る。
- 4・5 国立極地研究所発表論文抜粋部分：
タイトル：Historical space weather monitoring of prolonged aurora activities in Japan and in China
雑誌：Space Weather
著者：割愛
URL： <http://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1002/2016SW001493/abstract>
DOI： 10.1002/2016SW001493
論文公開日： 2017年2月27日
- 6 ハインリッヒ・シュリーマン（1822～1890）：ドイツの考古学者。トロイアの遺跡を始め、ミュケナイ・ティリンスなどのエーゲ文明の遺跡の発見・発掘に貢献。自叙伝『古代への情熱』
- 7 『イリアス』：古代ギリシャの長編叙事詩。「オデュッセイア」と共にホメロス作と伝える。24巻。10年にわたるトロイア戦争中の数十日の間の出来事を描いたもので、アキレスの怒りを主題とし、トロイア・ギリシア両軍の戦況の推移を描く。英語名はイリアッド。
- 8 毛馬村：現在の大阪市都島区毛馬町。蕪村当時の毛馬村は淀川改修工事で現在の淀川河川敷または本流下になっている。

- 9 **俳景**：俳句作品の創作にあたって、その作品の核心部分に影響を与えている全てのもの。現実の瞩目的風景を見て、作者がリアルな姿だけを捉えるのではなく、全ての自然風景（人事的事項も含む）から得る体験、体感を通じた感想、思考を含める。
- 10 **「春風馬堤曲」**：蕪村が安永6年（1777年）の春に刊行した春興帖『夜半楽』^{やはんらく}に発表した俳体詩（発句体、絶句体、漢文訓読体を融合したもの）である。藪入りの娘が淀川の毛馬堤を辿りながら故郷に帰る様を描いたものである。（『世界大百科事典第2版』等）
- 11 **蕪村の句碑**：大阪市都島区毛馬町の淀川堤防上に建立されている。ここからは、360度景色が眺望される。「春風馬堤曲」の中の「春風や堤長うして家遠し」の句が刻まれている。

この句碑は1978年の淀川改修工事100年記念として建立された。この句碑に先立つこと25年前(1953年)、旧毛馬洗堰堤防の下に小さな句碑があった。その後は北区長柄東3丁目の淀川工事事務所構内に移設され、現在は、都島区毛馬町1丁目12番地の蕪村公園に移設されている。句碑には「春風や堤長ふして家遠し」と刻まれている。裏面には「此ノ所在地ヨリ北方約三百米突地点ニ在リシ」と蕪村の生家の位置を示している。



1953年建立の蕪村句碑

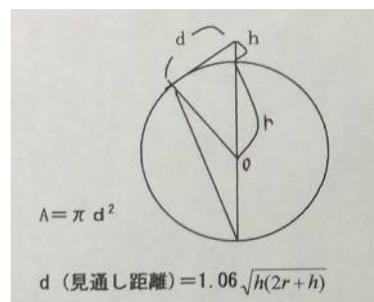
(2017年11月13日 筆者撮影)

- 12 **比叡山**：京都市北東方、京都府・滋賀県の境にそびえる山。古来、王城鎮護の霊山として有名。山嶺に2高所があり、東を大比叡または大岳（848メートル）、西を四明岳（839メートル）という。東の中腹に天台宗の総本山延暦寺がある。
- 13 **地平線の数学的計算**：「keisan 生活や実務に役立つ計算サイト」（以下に示す）

<http://keisan.casio.jp/has10/SpecExec.cgi?id=system/2006/1179464017> から引用して計算してみると。四明岳（839メートル）からの見通し距離は109.66kmとなる。毛馬から比叡山四明岳までの距離は精々約60kmなので見えて当然である。

計算式は d （見通し距離） $= 1.06 \sqrt{h(2r+h)}$ である。 A は見通し面積。 h は高さ。 r は地球の半径で6378kmとしての計算である。右下図は筆者作成。

尚、毛馬堤に立って地平線が見え距離は同じように計算すると8.88kmである。当時の堤の高さは守口市にある文禄堤（慶長元年、1596年完成）から予想して、約4mとする。大人の目線を1.5mとして+すると、毛馬堤上の人目線の高さは5.5mと仮定して計算する。そうすると、毛馬はもちろん周囲山に囲まれているので、普段は西側の大阪湾方面以外は山々が見える。しかし、狭いと言えども大阪平野の真ん中にある毛馬の景色は広々



と拵がっていることが計算上でも証明できる。

- 14 **下総結城時代**：蕪村は二十歳前後に江戸に出る。寛保2年（1742年）、師匠の夜半亭宋阿やはんていそうあの死を切っ掛けに江戸を離れる。同門の砂岡雁岩いさおかがんとうを頼って下総結城に赴く。砂岡家の菩提寺「弘経寺くぎょうじ」（墨梅図・楼閣山水図・等の襖絵10幅が残っている）に草庵を結ぶ。宝暦元年（1751年）秋に上洛するまで、結城、下館を中心に関東、東北の各地に足を延ばしている。絵の修行もよくしており、蕪村初期の絵画がいくつも残っている。また、この時期に俳諧修行も怠らずしており、延享元年（1744年）初めて蕪村の号を用いて、歳旦帖を初めて上梓している。延享2年（1745年）には、積蕪村と自称するようになる。この結城時代は蕪村の画家、俳人としての礎を築いた年月であった。
- 15 **丹後時代**：宝暦元年（1751年）に京都に赴いてから3年後、宝暦4年（1754年）の春、丹後宮津けんしやうじの見性寺住職の竹溪の元に身を寄せる。宝暦7年（1757年）までの3年間を過ごす。ここでも俳諧の修行をするのであったが、絵画の修行が主であった。多くの作品が残されている。蕪村の画家としての名声が高まった時代であった。
- 16 **内藤鳴雪**：俳人。（1847～1926）江戸三田一丁目生まれ。松山藩士内藤房之進ともざね同人の長男。俳句はたまたま常磐会寄宿舎（松山市出身の書生の為のもの）の舎監をしていた時、正岡子規が舎生におり、子規の感化によって明治25年（鳴雪は46歳）より始めた。日本派（子規派）の重鎮として長く俳壇で活躍した。
- 17 **新聞「日本」**：創刊は1889年（明治22年）2月11日。廃刊は1914年（大正3年）12月31日。社長兼主筆くがかつなんは陸羯南。国家主義、国粹主義的な論調であった。また文学作品も取り入れたのも特徴的であった。正岡子規は1892年（明治25年）に入社。子規は同紙で『歌よみに与ふる書』を連載するとともに、同紙に俳句投稿欄を新聞紙史上で初めて作った。初めて掲載された俳句は「我王の二月に春は立にけり…子規」「酒もすき餅もすきなり今朝の春…虚子」等である。俳句のホトトギス派、短歌のアララギ派の礎を作ったと言える。
- 18 **「地図的観念と絵画的観念」**：『子規全集 第四卷 俳論俳話一』 117頁～122頁
1976年11月18日 講談社。
- 19 **中村不折ふせつ**：1866年8月19日（慶応2年7月10日）～1943年（昭和18年）6月10。明治、大正、昭和期に活躍した洋画家、書家。浅井忠あさいちゆうや小山政太郎から絵を学ぶ。浅井忠の紹介で1894年に正岡子規と出会い、新聞「小日本」の挿絵を担当することとなった。子規は洋画の「写生」を中村不折から学んだ。不折は子規のその後の文学活動に大きな影響を与えた。夏目漱石の『吾輩は猫である』の挿絵画家としても有名である。
- 20 **気象庁かすみの「霞」の定義**：気象観測において定義されていないので用いない。ただし、霧時の見え方（視程）によつての区分がある。次に示す。
霧……………微小な浮遊水滴により視程が1km未満の状態。
濃霧……………視程が陸上でおよそ100m、海上で500m以下の霧。
靄（もや）…微小な浮遊水滴や湿った微粒子により視程が1km以上、10km未満と

なっている状態。

煙霧……乾いた微粒子により視程が10km未満となっている状態。

霞はぼやけて遠くを見れない状態を指すので、霧、煙霧のような状態のことであろう。

春先、霧や煙霧に包まれることはよくあることだ。淀川堤から霞んだ状態で見える景色は田畑の中に大きく曲がりながらゆったり流れる山なき景色ばかりである。

- 21 **鬼頭宏**：1947年3月2日静岡県生。経済学者。歴史学とも関連が深い日本経済史の研究をはじめ、歴史人口学の造詣が深い。『人口から読む日本の歴史』（講談社学術文庫：2000年5月10日発行）等。
- 22 **三十石船**：江戸時代、大坂（八軒屋・道頓堀・東横堀・淀屋橋）と伏見（京橋・蓬萊橋・阿波橋・平戸橋）とを結ぶ旅客定期船のこと。三十石相当の積載量を持つ船で、屋形がなく苫を掛けて雨露をふせいだ。昼船と夜船（早朝に大坂に着いた）が運行された。大坂への下りは半日か半夜。上りは綱で船を引き上げていたので、一日か一晩かかった。運賃は上りは下りの倍額であった。船の形態は長さ約11.1m～15m、幅1.8m～2.1m。加子（水夫）4人。乗客28人。
- 23 **伏見の門人宛ての手紙**：安永6年（1777年）2月23日付の、さゝべ柳女（俳人鶴英の妻）・^{がつい}賀瑞親子宛ての蕪村の書簡のこと。この年の春興帖として出された『夜半楽』（「春風馬堤曲」「^{でんが}澱河歌」「^か老鶯児」が収められている。）が出来上がったので、それを配るための添え状的な書簡であるが、蕪村の毛馬村に対する深い思慕の念を感じさせられる書簡でもある。現在、蕪村が毛馬村生まれであることを証明する重要な書簡とされている。「春風馬堤曲」にある「馬堤は毛馬塘也。則余が故園也」の部分が決定的とされている。このことにより蕪村生誕地論争はほぼ結着を見た。
- 24 **藤井竹外**：文化4年（1807年）～慶応2年（1886年）に生きた幕末の高槻藩士で漢詩人である。本名は啓（または啓二郎・吉郎）で雅号として竹外、雨香仙史等名乗った。百二十石取りの高槻藩士・藤井沢衛門の嫡男。漢詩を頼山陽に師事。山陽亡き後は梁川星巖に学ぶ。竹外の作風は「文は山陽、詩は星巖」といわれている。「花朝下澱江」は竹外が自らの漢詩集『竹外二十八字詩』で巻頭に選んでいる。（『高槻のアンティーク 古曾部焼・藤井竹外・くらわんか茶碗 一川崎コレクション名品選一』高槻市立しろあと歴史館2013年3月16日）
- 25 **芭蕉の「荒海や佐渡によこたふ天の河」**：『奥の細道』を代表する句。「夜の荒れた日本海の上には天河（天の川）が佐渡ヶ島にかけて横たわっている」という意味の句であるが、この句については各論がある。新潟の出雲崎での作品とされている。この作品が詠まれた日は七夕も近い7月4日（新暦8月18日）であり、曾良の日記では夜中に強い雨となっており、天の川は見えなかったと考えられている。また、この季節、天の川は南の空から天頂にかけて輝く。佐渡ヶ島とは反対の方角である。芭蕉は実際の風景をリアルに表現したのではない。加藤^{しゅうそん}楸邨は「現代の写実的な作句法からいえば、一応虚構ということになる。しかし、これは簡単に虚構という型にはめこんで片づけてしまえないものだと思う」

と述べている。楸邨は芭蕉は象潟以来快晴の日本海沿いを行脚し海の向こうの佐渡ヶ島も見ており、出雲崎から佐渡へ流された人々をも思いやって詠まれたと解釈している。そして楸邨は次のようにこの句について述べている。「構成された幻の景であるが、そのことがかえって『芭蕉の山河』であることを確実にするものといってよからう」（『芭蕉の山河』加藤楸邨 講談社学術文庫 1996年10月22日 第5刷発行を参考にした。）

- 26 **藤村の「千曲川旅情の歌」**：島崎藤村（1872年～1943年）は木曾馬籠（現：岐阜県中津川市）生まれ。詩集『若菜集』などでロマン主義的詩風を示した。小説『破戒』『春』等によって自然主義文学の代表者となった。「千曲川旅情の歌」はロマン派の中心誌『明星』の創刊号（明治33年4月）に「一」の部分のみ掲載された。当時の詩題は「旅情」であった。

「小諸なる古城のほり/雲白く遊子悲しむ/緑なす繁縷は萌えず/若草も藉くによしなし/しろがねの衾の岡邊/日に溶けて淡雪流る」は国民的愛唱詩でもある。この詩の季節を問うと多くの者が「春」と答える。詩句をしっかりと読めば「冬景色」であることが分かる。どうしてそのようなになるか、文芸学者の西郷竹彦は作者の心の目、すなわち「内の目」が春を希求しているからだと分析している。（この「冬景色」をめぐって、西郷竹彦は視点人物〈作品〉に重きを置く立場、古田拓は作者〈作家〉に重きを置く立場で解釈を為した。この両者で長きに渡って論争があった。これをいわゆる「冬景色論争」という。ここでは詳述しない。）その作者の心に読者は寄り添うから「春」を感じるという分析である。詩は現実をしっかりと描写しているが、醸し出す雰囲気は違うものを創り出す典型的な作品例である。

- 27 **小林一茶の「ふるさとや寄るもさわるも茨の花」**：一茶は宝暦13年5月5日（1763年）生まれ、1828年1月5日没する。信濃柏原宿（現：長野県上水内郡信濃町大字柏原）の中百姓の長男として生まれた。3歳の折、実母を亡くし、8歳の時継母が来る。この継母との仲が悪く孤独な少年時代を送る。安永6年（1777年）14歳で江戸へ奉公に出されるという生い立ちであった。継母・その子と長く財産争いをする。その過程で村人たちからも快く思われなくなる。掲句はそういう状況のなかで詠まれたものである。代表作品は『おらが春』

- 28 **室生犀星の「小景異情」**：犀星は1889年に生まれ、1962年に没する。金沢市生まれ。本名は照道。詩人・小説家。その生い立ちは複雑で、生まれてすぐに近くの真言宗の寺、雨宝院に貰われて行く。養母に虐げながらの少年時代を過ごした犀星は故郷を「ふるさととは遠きにありて思ふもの/そして悲しくうたふもの/よしや/うらぶれて異土の乞食となるとても/帰るところにあるまじや……」（『抒情小曲集』大正7年 自費出版）とうたった。

新保千代子は『ふるさととは遠きにありて……』の詩の中に、詩の表面とはうらはらに、泪ぐましい程の犀星の故郷慕情が秘められていることは、いうまでもない（『文学の旅 8 北陸・能登』133頁 千赴会 1972年12月1日発行）と犀星の故郷への思いを評している。

- 29 **石川啄木の「石をもて追はれるごとくふるさとを出でしかなしみ消ゆる時なし」**：啄木は戸籍上1886年（明治16年）2月20日生まれであるが、1885年10月28日に誕生したとも言

われている。1912年（明治45年）4月13日没。明治以降の近代は多くの田舎（故郷）の人々を労働者として都市へ流入させた。都市で生活する人々の故郷への思いは懐かしく美化されることが多い。一方、故郷に住む人々との思いとはまた違うものとなっていく。近代化が進むにつれ、都市生活者と田舎（地方）生活者の生活感はかけ離れて行く。その中で上掲の犀星や、萩原朔太郎などは故郷への複雑な思いを詠みあげたのである。では啄木の場合はどうであろうか。堀江信男は「美しい山と川とに恵まれた自然との親しい関係は、何にも阻まれることなく深く親密になっていった。しかし人間関係はかれのありあまる才能への驚嘆が、住民との真の一体感を育むことを阻んだ。それが、あとで『石をもて追はれるごとく/ふるさとを出でしかなしみ消ゆる時なし』とうたわなければならなかった遠因であろう」（『石川啄木辞典』219頁 国際啄木学会編 榎おうふう 発行 2001年9月25日）と上掲の啄木の短歌を評している。

- 30 **摩耶山**：六甲山地の一峰。神戸市灘区にあり、標高702m。山上に摩耶夫人（まやぶにん）をまつる切利（とうり）天上寺があり、眼下に神戸港を見る。『広辞苑 第6版』
- 31 **『淀川兩岸一覽』**：暁晴翁 著述：松川半山 画図。
暁 鐘成（あかつき かねなり）1793年—1860年。松川 半山（まつかわ はんさん）1818年—1882年
心齋橋筋北久太郎町：河内屋喜兵衛が文久元年（1861年）刊行。
- 32 **『浪華の賑ひ』**：初編/ 鶏鳴舎暁晴 編輯：松川半山 画図。暁 鐘成（あかつき かねなり）1793年—1860年。松川 半山（まつかわ はんさん）1818年—1882年
心齋橋筋北久太郎町：河内屋喜兵衛が安政2年（1855年）刊行。
- 33 **渡月橋**：京都市右京区の嵐山の麓を流れる保津川に架かる橋。
- 34 **「花影上欄干」「山影入門」**：王荊公の「月移^{リテ}花影^ニ上^ニ欄干^ニ」（聯珠詩格卷3・夜直）と「山影入^リ門^ニ推^シモ不^レ出^ズ 月光舖^キ地^ヲ掃^ヘドモ還^ラズ」（百聯抄）による。
（『蕪村全句集』93頁 藤田真一・清登典子編）
王荊公（王安石：1021年～1086年）は中国、北宋の政治家、文人。撫州、臨川（江西省）の人。字は介甫。号は半山。荊公とよばれる。宋の神宗の信頼のもとに政府首班として新法を推進した。また唐・宋八大家の一人に数えられる文章家で、詩人としてもすぐれていた。著書に『臨川集』『唐百家詩選』など。（『ブリタニカ国際百科事典』）
因みに、蕪村の讃岐時代に金毘羅で逗留した家は「臨川亭」と称されている。蕪村と王安石の関りを示すものでもある。
- 35 **「俳諧の自在」**：春の暁、月影が西に動くにつれて、花の影が東から立ち現れてくる。春の月と花の影という、春の両主役の移動を一句にいい取った点を、「俳諧の自在」と自負した。
（『蕪村全句集』93頁 藤田真一・清登典子編）
- 36 **『春泥句集』**：黒柳維駒（くろやなぎ これこま）編
父は召波（しゅうは しょうは）（1727年～1771年：京都の富商。俳諧を蕪村に学び信頼を得ていた。別号は春泥舎〈しゅんでいしゃ〉、通称は清兵衛）。維駒は召波没後、『春泥句集』を編した。蕪村は

この句集の序に名高い「離俗論」を寄せた。（『新編 俳句の解釈と鑑賞辞典』を参考）

³⁷ 『蕪村 画俳二道』： 238 頁 瀬木真一 美術公論社 1990 年 8 月 8 日

³⁸ 『蕪村 その二つの旅』（蕪村展図録）14 頁 朝日新聞社 2001 年

^{39・40} 『蕪村 画俳二道』： 238 頁 瀬木真一 美術公論社 1990 年 8 月 8 日

⁴¹ 『土佐日記』：承平 4 年（934 年）12 月 21 日出発、翌 2 月 16 日京の旧宅に入るまでの旅を、女性に仮託して仮名文で書いたもの。（『広辞苑第六版』）

承平 5 年 2 月 6 日に難波に着き河口に入り、2 月 16 日に京に着いている。この間淀川を船で遡る訳だが、淀川の水量が足りなく 10 日以上も掛かっている。鳥飼、御牧、渚の院、鶴殿、八幡の宮、山崎など、今日の淀川沿いの地名が出てくる。京を前にして中々旅が捗らない気持ちが歌と文でもって表現されてもいる。

⁴² 能の「江口」：観阿弥原作、世阿弥改作。『新古今和歌集』などのみえる西行と遊女の歌問答と、『故事談』などにみえる遊女が普賢菩薩として現れた話とを典拠として作られた作品。

ある僧が江口の遊女の旧跡を訪れ、夜もすがら読経していると、月の澄み渡る川面に屋形舟が浮かび、遊女たちの姿が見える。遊女の霊は、人の世の迷いが集約されているその環境こそ悟りへつながるのだと語り（〈クセ〉）、舞を舞う（〈序ノ舞〉）。やがて舟は白象と化し、遊女は普賢菩薩となって西の空へ去る。

（『能・狂言辞典』31 頁 西野春雄・羽田 昶 平凡社 1987 年 6 月 24 日）

江口は神崎川と淀川の分岐点で平安・鎌倉時代の交通の要所であった。延喜 4 年（785 年）淀川と三国川（現：安威川の下流）との間に新川を掘って、二つの川の水路が結ばれた。このことによって江口は山陽・西海・南海の三道を必ず通る宿場町として繁栄した。現在の寂光寺（江口の君堂）辺りの淀川は今より広々とした風景であった。

⁴³ 享保の大凶作：享保の大飢饉のこと。江戸四大飢饉の一つ。享保 17 年（1732 年）夏、冷夏と害虫（ウンカ）により中国・市国・九州地方の西日本各地、とりわけ瀬戸内海沿岸一帯が凶作に見舞われた。梅雨が約 2 カ月にも及び冷夏をもたらした。被害は西日本 46 藩にも及んだ。通常の 46 藩の総石高は 236 万石であるが、この年の収穫は 27% 弱の 63 万石であった。餓死者は徳川実記によれば 969,900 人とされている。この享保の大凶作が蕪村の出郷の遠因とも言われている。「蕪」とは「荒れる」「雑草が生い茂って荒れる」「荒蕪」の意。当時、毛馬もこの大凶作の影響で荒れていたことは想像に難くない。蕪村の号はこのことと無関係ではないだろう。また、東晋の陶潜の詩「田園将蕪」（田園将に蕪〈あ〉れんとす。）が蕪村の脳裡にあったのであろう。

※ 出典表記のない「注」は、『ブリタニカ国際百科事典小項目版電子辞書版』・『広辞苑第六版』（電子辞書版）、『広辞苑第四版』、Wikipedia（ウィキペディア フリー百科事典）等を参考に記述した。

【参考文献・出典一覧】

- 『新撰増補大坂大絵図』元禄四年（1691年）（大阪府立中之島図書館所蔵）
蕪村画「花見句画賛」蕪村晩年の作（クレジット：公益財団法人阪急文化財団 逸翁美術館蔵）
「大阪地図」天明9年（1789年）「国土交通省 淀川河川事務所提供」
『淀川兩岸一覽』文：暁晴翁 絵：松川半山 文久（1861年）（国土交通省 淀川河川事務所提供）
『浪華の賑ひ』暁鐘成 著 松川半山 画 文久3年（1863年）（大阪府立中之島図書館所蔵）
「明治18年 京阪地方仮製2万分の1地形図」（大阪府立中之島図書館所蔵）
『守口市史』守口市役所 守口市史編集委員会編集 1963年
『文学教育入門』西郷竹彦 1966年 明治図書出版
『子規全集 第四巻 俳論俳話一』1976年11月18日 講談社
『文学の旅 8 北陸・能登』千赴会 1972年12月1日発行
『俳句辞典 近代』桜風社 1977年11月15日
『蕪村の世界』山下一海 有斐閣 1982年11月20日
『俳諧師蕪村・差別の中の青春』小西愛之助 明石書店 1987年1月20日
『能・狂言辞典』西野春雄・羽田 昶 平凡社 1987年6月24日
『土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記・新日本古典文学体系』岩波書店 1989年11月20日
『新潮古典文学アルバム 21 与謝蕪村・小林一茶』新潮社 1991年3月10日
『蕪村秀句』永田龍太郎 1991年6月28日 永田書房
『月は東に 蕪村の夢 漱石の夢』森本哲郎 1992年7月5日2刷 新潮社
『蕪村全集』第1巻～9巻 講談社 1992年12月～2009年9月
『蕪村と俳画』岡田利兵衛 1997年9月10日 八木書店
『天明俳諧集・新日本古典文学体系』岩波書店 1998年4月27日
『発生から現代まで 俳句の世界』小西甚一 講談社学術文庫 1999年7月23日 第8刷
『人口から読む日本の歴史』鬼頭 宏 講談社学術文庫：2000年5月10日発行
『蕪村 その二つの旅』（蕪村展図録）朝日新聞社 2001年
『石川啄木辞典』国際啄木学会編（株）おうふう 発行 2001年9月25日
『新編 俳句の解釈と鑑賞辞典』尾形 仵 編 笠間書院 2002年6月25日 初版2刷
『蕪村全句集』藤田真一・清登典子編 2002年（株）おうふう
『市立 枚方宿鍵屋資料館 展示案内』枚方市教育委員会 2003年12月1日 第2刷
『芭蕉の孤高 蕪村の自在 ひとすじの思念と多彩な表象』雲英末雄 草思社 2005年7月7日
『与謝蕪村の日中比較文学的研究』151頁 和泉書院 2006年1月28日
『白の詩人 - 蕪村新論』山下一海 ふらんす堂 2009年3月24日
『芭蕉・蕪村 人と書と絵』逸翁美術館 2010年4月16日

『高槻のアンティーク 古曾部焼・藤井竹外・くらわんか茶碗 —川崎コレクション名品選—』

高槻市立しろあと歴史館 2013年3月16日

『子規と「小日本」=新聞界の旋風=』 (第60回特別企画展図録)

松山市立子規記念博物館 2014年8月2日

国立極地研究所 URL: <http://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1002/2016SW001493/abstract>

「keisan 生活や実務に役立つ計算サイト」

<http://keisan.casio.jp/has10/SpecExec.cgi?id=system/2006/1179464017>

北海道大学 情報基盤センター http://www.hucc.hokudai.ac.jp/online_database.html

「Google マップ」

<https://www.google.co.jp/maps/@34.8025907,135.3114374,57548m/data=!3m1!1e3>

「名言・格言『アルベルト・アインシュタインさんの気になる言葉+英語』一覧リスト」

(http://iso-labo.com/labo/words_of_Einstein.html)

『ブリタニカ国際百科事典小項目版電子辞書版』・『広辞苑第六版』（電子辞書版）・『広辞苑第四版』